

広報ほろきは令和5年5月号から穴あけを廃止しています。広報紙をつづる際には、【●】マーク・【▼】マークを目印にパンチなどで穴を開けていただきますようお願いいたします。

2・3階展示

美術館
だより

Vol.174

植田正治のアプローチ
〈人物〉

2023年6月17日(土) - 9月10日(日)

今回の企画は、写真家が被写体にどのように向かい合い、どのように撮影したのか、いわば「対象へのアプローチ」をキーワードに、植田正治の人物写真に着目します。

〈綴方・私の家族〉として発表された弓ヶ浜での家族写真や砂丘での演出写真など、もっとも植田らしいイメージの数々は、植田が地元、境港で写真館でのスタジオ撮影の延長線上にあるように思えてなりません。広々とした砂浜や砂丘は植田にとっては、天然のスタジオであり、写真表現の実験の場でした。

「演出」と呼ばれる写真家の意図による人物の配置やポーズづけも、写真館での植田の経験がベースになっているように感じられます。

そんな植田も、1950年代はじめリアリズム運動の中で、人物が撮れないと語っていたことがあります。植田にとって写真とは何かを自問しながら、その後「自分の写真」を模索していったのでしょう。1950年代末、植田は周囲に、「自分の今後進むべき道を再認識した」と語っています。その後のシリーズ〈童暦〉、〈小さい伝記〉をみると、多くの人物写真であふれています。植田は試行錯誤のなかで、自身の写真の原点に立ち返り、「撮ること」、そして「撮られること」とは何か、さらに、カメラを意識させ正面から撮るという方法論が、植田にとっての明確な人物へのアプローチとなっていきます。カメラを意識させずに人々の自然な姿を撮ることもひとつの方法ではありますが、撮影という行為において、カメラを意識させることもある意味、「自然」と考えたのでしょうか。向けられたカメラに、被写体の人々がどのように反応するか、撮られることに不慣れな人々の素朴でストレートな反応をそのままにとらえることも、植田ならではのアプローチであり、作品の魅力ではないでしょうか。



少女たち 1950年

【同時開催】1階D展示室

植田正治物語 — 写真するボク —

植田正治の生涯にわたる写真活動の軌跡を紹介しています。ぜひご覧ください。

問い合わせ先

伯耆町立植田正治写真美術館
TEL:0859-39-8000

メール: bijyutsukan@houki-town.jp

ホームページ: https://www.houki-town.jp/ueda/

■開館時間/10:00~17:00 (最終入館は16:30)

■休館日/火曜日(祝日の場合は翌日) 8月15日は開館

町民の方は入館無料です

ご来館の際は、町民無料招待券、または免許証など住所のわかるものを提示してください。

町民無料招待券

一本券を切り取ってご利用ください

植田正治のアプローチ

これは見本です

※本券1枚につき一世帯様無料でご利用いただけます。
休館日: 毎週火曜日(祝日の場合は翌日) 8月15日(日)は開館します。

伯耆町立植田正治写真美術館

伯耆町須村353-3 TEL:0859-39-8000